医学資料の整備について

The Strengthening of Medical Information Resources

浜松医科大学（現筑波大学図書館部）

今村 慶之助*

I はじめに

医学図書館編集部から原稿依頼を受けた際、「国立医学図書館」についてということであったが、私は現在、日本医学図書館協会（以後、協会と略）から離れているので、標記の事項を書くことで、その責を免じて頂くことにした。単に整備と言っても意味不明なので、本論に入る前に、趣旨説明をさせていただくと、協会加盟館の図書館活動の内容は、他の分野のそれと比較して、最も優れていると自他共に認めている。私もその通りであろうと思う。しかし、浜松医大へ来て、図書館創設の作業に3年間従事し、我が国の大学図書館システムの貧しさを改めて学んだ。最も優れているはずの医学図書館を素材としてまことに恐縮であるが、我が国の大学図書館の改善のために、更にやがて来るであろう情報社会に備え図書館の足腰を鍛える意味で、図書購入費、蔵書、その核としての国立医学図書館について述べたい。図書購入費については、集中化との関連で、図書館予算と教室研究費による図書購入費額を調べてみた。できれば積算根拠を定率化として一般化できないかという気持がある。利用して頂ければ幸である。蔵書については、蔵書構成は図書館員に責任があるという視点から考えてみたい。毎日図書の背を眺めている私達が蔵書の欠陥に精通しており、私達がその是正に手を着けない限り、欠陥は永久に欠陥のままである。その意味で現在の作業のやり方を点検し、認識を改め、体質の改善に努めたい。私はサービスの源泉である蔵書を改善するのに1館の努力では困難で、国レベルのシステムとして取り上げるべきだと考えている。国立医学図書館については、過去に多くの先輩

の努力の足跡があり、また協会もその推進の体制を整えたので、私達はただその進軍ラッパに従うのみである。

II 図書購入費について

図書館は、大学組織の発展過程の中で、図書の集積という自然発生的な成長過程を経て、現在の形に至ったので、その歴史的な絆を断ち切り、いろいろな意味での格差を是正することは、まことに困難である。現在、各大学の基礎・臨床の講座構成²⁾、大学院、学部学生数等は国公私間に大きな差はなく、比較的近質的である。したがって、歴史的足どりによる蓄積の差は当然のことながら、単年度の図書購入費の差は考えにくい。しかし、図一1、国立大学医学部の図書館と教室の図書購入費の比較に現われた形は複雑で、人によっていろいろな感想を持たれるであろう。これは協会の第48次加盟館統計の中から国立大学の図書購入費を取り出し、図書館の図書購入費の大きさの順に並べたものである。図の中央を横に引かれた線「教官+学生当積算校費の10%」とは、国立大学の源資である両者から図書購入費（図書館）を、次のような計算で積算したものである。

教官当積算校費

$$\text{基礎} \quad 14 \text{講座} \times \text{昭51単価} 6,091 \text{千円} \times \frac{10}{100} = 8,528 \text{千円}$$

$$\text{臨床} \quad 16 \text{講座} \times \text{昭51単価} 6,611 \text{ " } \times \frac{10}{100} = 10,578 \text{ "}$$

学生当積算校費

$$\text{学生数} \quad 400 \times \text{昭51単価} 42.9 \text{ " } \times \frac{10}{100} = 1,716 \text{ "}$$

$$\text{以上合計} \quad 20,812 \text{ "}$$

図一1の黒い棒線は図書館の、白は教室費による図書購入費を示す。

サンプルとして国立大学の医学図書館を組上に乗せたが、それぞれのサービス対象の範囲、歴史的組織的背景にある程度の巾はあるが、それらの事情を考慮しても、猶且このグラフを見て、同じ国立大学間に存在する図書館

* Keinosuke IMAMURA : Hamamatsu University School of Medicine

（昭和52年11月9日受理）

図一 国立大学医学部の図書館と教室の図書購入費の比較

機能の差違の大きさに、改めて嘆息せざるを得ないであろう。私共は、この図の右側に白く高くそびえる棒線を目にして、当該大学の熱心な利用者の心中を想い、つらい気持ちになるのである。「情報は何人にも平等な利用の機会が与えられるべきである」。申すまでもなく図書館の意義はこの情報公開の使命を果たすことから始められなければならない。図書購入費の図書館と教室との関係は金額的には風船みたいなもので、いずれかが多ければ、片方は小さくなる相関関係にあるように思われる。両者均等に保つという、中途半端な関係は成立し難く、いずれか一方に片寄る。自明のことながら、教室に片寄った場合には、教室間に多数の重複購入が行なわれていようし、他教室の資料を利用することはむしろ少く、教室資料の増加に更に拍車をかけ、その教室に無い場合は、学外にルートを求める率が高まるのではなからうか。各大学にはそれぞれ事情があること、医学は講座制の壁があることなど、図書館へ集中することの障碍が大きいことについて理解されなければならないが、しかしある程度の Working reference を教室に置く必要があるとしても、このままの分散、即ち教室中心を放置することは、ネットワークとか、ナショナル・センターへの主張を著

しく弱めるのみならず、図書館活動そのものへの不信を、愈々増幅させることになりかねない。集中化は極めて困難な戦であり、広報活動をさらに一層徹底させなければならないが、一方、集中化には図書館自体の体質改善も求められているところであり、特に夜間開館とは表裏の関係にある。集中化を果している図書館は、図書館員の努力によって夜の開館時間を延長し、その成果を得ているところが多い。しかし私は、この夜間開館が大学図書館運用上影響するところの大きさについて、中央館と大学当局の理解と努力が不十分ではないかと思う。単に行政的努力を求めるだけでなく、両者の認識と行動の一致が求められる。殊に、夜間閲覧業務を定員積算の基礎に反映せしめるよう、中央館の努力が一層望まれる。

Ⅲ バック資料の収集について

昭和45年以降の医学部等の設置は、予定を含め34大学に及び、まさに古今東西にその例を見ない、未曾有の医学部ラッシュである。「洛陽の紙価を高める」というが書店の活躍も激しかった。しかし、新設校に経済的余裕が有るわけがない。折しも大学設置審議会は医学部設置基準を改め、専門図書を3万冊以上とした。各大学は赴

任教官の出身校等の手蔓を求め、既設校等の重複資料の獲得に動いた。大方の衆知の事実である。その尽力者には申しわけないが、これらの重複資料の多くは、かなり古く且欠号が多い。受入側が自主的に選定した場合は別として、箱を開けてみないと中に何が入っているかわからないような、どちらかといえば、書庫整理が目的であるような出し方は、心ある図書館員の態度とはいえない。そもそも、バック雑誌を1対1の大学間のやり取りで、巻号を揃えるなどということは、誰が考えてもできることではない。協会の交換業務の意義は、まさにこの点にあるが、私はこれを更にシステム化した、公的な機関の設置が必要であると思っている。

1. バック・ファイル整備の必要性

雑誌は購読を始めた時から欠号を防ぎ、継続購入を守ることが、第一義的に必要なことであるが、図書館員的心得としては、それだけでは不十分である。購入の開始は創刊時からというのは稀であって、その雑誌の学術雑誌としての評価が定着した時、学部・学科等の創設など不特定のところから始まる。したがって、そのタイトルの過去何年分のバックを揃えるべきかの評価と、予算確保は図書館員の重要な任務である。表一1は JBC (Journal of Biological Chemistry) の所蔵館を、学術雑誌総合目録⁹⁾ から取り出したものである。同目録の収載館数は360館で、そのうち25館が継続受入を中止し、継続館数は335館である。創刊から受入れている館は33館であるが、途中受入中止することなく、全所蔵している館は僅かに7館である。第101巻以降を見ても、その時点から受入れている96館のうち、全所蔵館は18館、第201巻(1953)以降においても、全所蔵館は360館中125館で、津田説⁴⁾による「JBCの80%のサービスをカバーするには過去20年以上の所蔵が必要」とすれば、その線を越える館は約35%で、国じく60%ラインとされる過去15年(第235巻1960年以降)を全所蔵するのは175館で、約50%である。図一2は同じく JBC の第1巻以降の所蔵状況をグラフとしたもので、所蔵館数とはそれぞれの巻の所蔵館数であり、受入館数とは受入を開始した館を線で結んだものである。したがって、Aは所蔵実数、Bは欠号、Cは所蔵無しということになる。バック・ファイル整備の要件としては、各所蔵館は自給能力を少なくとも60%、できれば80%まで高めること、Bの欠号の補充を行うことである。ご存知のように JBC は、医学で最も利用度の高いのみならず、自然科学界の代表的な重要雑誌が、このように不完全なままで所蔵されているのは、明

表一1 JBC の所蔵館数の推移

項目 \ 巻	1—250	101—250	201—250
全 所 蔵	7	18	125
不完全所蔵	26	78	74(25)
途中から所蔵	63	102	161
計	96	198	360(25)

数字は館数 () 受入中止館 内数

らかにその欠号の補充供給システムに欠陥があるからである。

2. バック資料収集システムの整備

第43回国立大学図書館協議会総会(昭和52年6月)に於て、滋賀医科大学から「収集センターの設置」と題して、バック資料を各大学の協力、及び行政的援助により経済的・安定的に各大学が収集することのできるシステムを作るよう求める提案があった。この提案は小委員会(相互利用調査研究班)で更に調査研究を進めることになったが、具体化の方向へ進むことを願ってやまない。

本稿において、収集のシステム化を必要とするところについて、少し考えてみたい。その第1にバックの市場が不安定であるということである。バック資料は、一部のリプリントものを除いて、計画的な生産によるのではなく、需要によって商品として動くにすぎない。したがって、

- ① 市場性の有るものだけが対象になる
- ② 揃っていないと意味がない
- ③ 在庫は無いと考えるべきだ

といった条件に支配される。市場価値と学術価値とは、必ずしも一致しないし、我々は揃い物だけを求めているわけではなく、1号1巻を求める場合がむしろ多い。即ち、バックの範囲は広く、商業活動のできるのはその一部である。対象範囲が広いということは、ストックが困難であることでもある。ストックも商品である以上、在庫品は資産と評価され、税の対象となる。そのため出版物は、発行後流通経路に乗り、一定期間を経て返本されたものは、紙屑となって廃棄される。したがって、この時点ではバックは存在しないことになる。バックが市場へ出るのは、その後徐々に増大するのであるが、一方需要は年を経るにしたがい、通減する傾向にある。これと価格の関係はその時々両者の力関係で変化し易く、軽率な購入は慎むべきである。特に外国雑誌は国内に在庫は少ないと思われるので、時間的余裕が必要である。

図-2 JBC の国内所蔵巻数

しかし、業者によるバック市場を否定するものではなく、業者の収集能力を活用することにより、大量を容易に集めることができる。したがって私は、米国における USBE と MLA のように、我が国においても私的企業と公的な収集機関、協会の交換活動等が相互に補完の関係を持つようにすることが望ましいと思う。

第2には個人所有資料の活用である。学術資料の多くは商業出版以外の、学会等学術団体が発行し、会員また

は会議等の参加者配布になるものが多い。これらの資料は利用価値が十分あるのに拘らず、処分されている。資料は整理されることによって価値が生まれる。これらの個人の、時には図書館等団体の、不要資料を受入れ、再利用の道を開くべきである。最近、資源有限とかで、再利用の声が高い。

図書は昔から、そのように利用され馴染み深いやり方である。しかし、そのやり方は、各大学が個々に、バラバラでは駄目で、全国的なシステムとして行なわなくては非効率的である。

第3に、二次情報システムの発展に備え、一次資料を各図書館が整備されるべきであるが、現システムでは、量的、経済的等極めて困難であろう。科学技術庁の科学技術情報懇話会による「科学技術情報の全国的流通体制

の整備に関する中間報告について」（昭和48年8月）、及び文部省の学術審議会学術情報分科会による「学術情報の流通体制の改善について」（昭和48年7月）等、学術情報体制整備の指針とされるものには、学術情報を主として二次情報の面から取り上げ、その収集・加工・流通を論じているが、一次情報については図書館等が既に収集し保存しているものとして、その利用のみを論じ、その保存されている資料の質的量的内容の検討及びその整備の方法等については一顧だにしていない。CA・BA・EM・SCI・MEDLARS など、数えれば切りのないこれらの二次情報データ・ベースから、文献情報が奔流のように、研究者の手許へ流れるようになったら、一体我々は一次情報の手当てを、どのようにしたら良いのであろうか。「光ファイバー」による大量情報流通時代が間もなく来ると言う。私はこの新しい時代に対応するには、滋賀医大の提案のように「収集センター」を設け、その収集と供給をシステム化することが不可欠と思う。

Ⅳ 国立医学図書館について

協会は昭和52年度第48回総会において「国立医学図書館設立のための特別推進委員会を設置する件」を協議決定したと聞き、感慨を深くした一人である。折しも、文部省は昭和52年度予算で実現した外国雑誌購入費の一部を、共同利用のための経費として、医学は九州大学を地区センターとし、大阪大学を全国・地区センターとし、それぞれ配分した。これは医学文献の共同利用システムとして、具体化の第一歩が着手され、今後の成果は関係者の努力に負うところが大きいとはいえ、協会の動きと共に、誠に意義深いことであった。私共は両者の動きが今後の医学図書館活動のために望ましい方向へ発展するよう、協力支援を惜しまない。国立医学図書館については本稿の帰結として、どうしても触れなければならない。そこでやや感想文風ではあるが、イメージとしての National Library of Medicine 像を画かせていただければ、次のようなものである。

1. 一次資料の網羅的収集 これは医学図書館のナショナル・センターとしての譲れない原則であって、医学関係者総ての一致した願いである。この網羅的収集については、いろいろな解釈、論議があるかもしれないが、現場からの声は比較的純粋に、利用者の立場にたった発言である。会議録・報告書・官庁および国際機関出版物・博士論文等、どちらかといえば、個々の図書館にとって、需要がランダムなこともあり、組織的または効率的

な運用が不得手な分野については、殊に国家的な視点に立った収集が、大きく言えば国民のために必要なことである。

2. 二次資料 第1には世界の二次情報のターミナルとして、第2には日本語文献を加工処理して二次資料を編集する作業である。図書館としては、目録情報の一元的運用を特に期待している。

3. 医学史資料 私は最近、偶然の機会に「七科約説」という図書を、浜松医大蔵書として入手した。これは浜松医学校（明治4～13年間開学）の先生達が洋書を参考に著したもので、当時全国的に広く利用されたとされているが、保存されているのが僅かという、幻の古書である。この例のように、わが国の医学史資料の保存、利用の現状は、まことに貧しい状況にある。保存されている多くは大学関係であるが、誰でも利用できるわけではない。中には、特に個人の所蔵となっているものは、宝物扱いで、研究資料として使えない。したがって、保存と利用が両立できる、公的なきちんとした施設が速かに設けられなくてはならない。

4. ネットワーク 協会の相互利用活動が限界にきていることについては、多くの指摘を受けているところである。私はその“つけ”の総てを国立医学図書館へ、持って行こうとしているわけでは勿論ないが、ネットワークには核が必要であるし、NIST など、大規模情報伝達システムが動き始めた時に、医学の核なしでは困る。特に二次情報だけの独り歩きは危険である。

5. 教育研究機能 大学図書館改善論議に学術・研究・情報・機械などの言葉が頻出する。私自身も不用意且無意識に乱用しているが、正直な話、その中味はそれ程親しみ易いものとは云えない。即ち、私達の進む道を阻む大きな壁である。私共が、私共の自己研修に、この図書館へ期待する所は大きいのである。医学情報については診療情報システムのみの研究と応用が先行することなく医学文献情報の研究も併せて進め、医学の進歩に役立てるべきで、この図書館がその中心的役割を果たすことが望まれる。

以上、国立医学図書館に期待するところを羅列したが協会が広く意見を吸収し、具体化へ進まれるよう希望する。私はこれの実現のためには、かつて国文学研究資料館や国立民族博物館の設立のために、関連団体等が用いた巾広い連係と精力的な運動を学ぶ必要があると思う。国立大学図書館協議会も第24回総会に、前述の収集センターと併せて、滋賀医科大学から「国立医学図書館の設

置」について提案があり、調査研究することになっているので、協力する素地はできたと言える。

V おわりに

私は、我が親愛なる医学図書館界の内幕を暴いたようで、やや後めたい気分である。私が協会から離れ、いろいろな館種の方々と接し、その実情をより深く知るにしたがい、分野・館種を超えた協力の重要であることを痛感している。大学図書館の最も深い理解者であられる吉川前文部省情報図書館課長⁵⁾が「私は、我が国の大学図書館の将来に、深い憂慮を抱いている一人である」と述べられておられるが、これは大学図書館関係者の共通した心情であろうと思う。しかし、大学図書館の将来が暗いものであるとしたら、我が国の学術の進歩にとって大変不幸なことである。大学図書館の将来のために、我々の力でできることとできないことを認識する必要がある。できないことはできる有能な人を入れて、できるように改める必要があろうし、できることについては、その状況認識及び手段方法について、共通の理解が大切である。近年、大学図書館の進歩に大きく貢献したものの一つは国立大学への参考業務職員の配分であろう。出納台に、物も言わない冷い顔をした館員が一人のアプローチという大学図書館の窓口に、「お話ししましょう」という、温い血の通った窓口がもう一つできたのである。参考業務ということは、書物には一杯書いてあるが、当初担当者は何を為すべきか、大変とまどったに違いない。しかし参考係だということで、参考机に毎日座っているという

ことは大変なものである。私はその経験の集積を深く注目している。参考活動は医学図書館の専売特許だと思っただけで、とんでもない間違いである。できることで共通の理解を持つことの典型は、協会の相互協力のためのネットワーク・システム⁶⁾であろう。それは資料公開の原則（相互利用のはがきがあれば、門戸自由）による相互利用、共同目録の編纂、職員の教育、重複資料の交換等、これ程大規模且高濃度な優れたシステムは、この地球上にも唯一のものであろうし、そしてそれが、加盟館員一人一人の自主的な、一致した理解によって支えられていることを医学以外の図書館関係者は注目すべきである。私は大学図書館の将来を明るくする力に、この協同の力にあると思う。

参 考 文 献

- 1) 日本医学図書館協会：第48次日本医学図書館協会加盟館統計（昭和51年4月—昭和52年3月）1977
- 2) 文部省大学局：大学資料第56号—医学部・歯学部設置基準特集号—1975年12月
- 3) 文部省学術国際局：学術雑誌総合目録 自然科学欧文編 1975年版 1975
- 4) 津田良成：北里記念医学図書館における雑誌の利用調査 *Library Science* 2: 119—157, 1964
- 5) 吉川藤一：大学図書館の発展のために何をなすべきか *図書館雑誌* 71(4): 183—186, 1977
- 6) 岩井昭三、今村慶之助：専門図書館における相互協力 *学術月報* 27(3): 23—27, 1974